

01 海福寺本堂

尾道市西土堂町
明和2〜3年(1765〜1766)



元応2年(1320)開基の時宗寺院。入母屋造(いりもやづくり)、瓦葺で、中央後方の部屋が仏間になっている。一番の特徴は、幅の広い縁側(広縁・ひろえん)の上に、一枚ものの板をとりつけた鏡天井を設け、虹梁(こうりょう・緩やかな弧をえがいた梁(はり))と桁でその天井を支えている点である。全体的に非常に簡素な造りだが、江戸時代の時宗本堂の遺構としては全国的にみても貴重である。

02 良神社

尾道市長江一丁目



拝殿は、切妻造に掘立柱を基礎とした「神明造り(しんめいづくり)」で、江戸末期に再建された。境内には、かつて良神社の南に形成されていた鍛冶屋町の者たちによって祀られていた金山神社がある。また当神社にはクスノキが群生し、最大のものは高さ約25m、幹は約8mにもなる大木で、樹齢900年とも推定されており、広島県天然記念物に指定されている。

03 慈観寺本堂


尾道市長江一丁目
天保10年(1839)



貞治年間(1362〜1367)、慈観上人開基の時宗寺院。元和8年(1622)に栗原より現在地に移るとされる。本堂は、天保の大飢饉の際に、慈善事業として豪商橋本竹下(ちっか)が出資して建築されたものである。入母屋造、本瓦葺(ほんがわらぶき・平瓦と丸瓦を交互に使う)の二重屋根を持ち、虹梁や葦股(かえるまた・柱や屋根の重さを支える部材)にはにぎやかな彫刻が施されている。

04 福善寺と長江の町家


江戸時代後期
尾道市長江一丁目



境内地は、中世の山城である丹花城跡に含まれ、墓地には丹花城主・持倉氏の墓がある(「文化財マップ中世編」参照)。山門は龍の彫り物などが施された豪壮な門で、尾道名物のひとつである。福善寺は、かつて石見〜尾道までの銀の道「出雲街道」沿いにあった長江通りに面している。ここには江戸時代後期の町家が軒を連ねているが、これらは街道を行き交う人々を相手にした商店の名残である。

05 出雲街道道標


尾道市長江一丁目



かつて石見銀山で産出した銀は、全長約130kmの出雲街道を、3泊4日かけて尾道まで運ばれ、ここから船で搬出された。御袖天満宮を下りた辺りに1基の石造物がある。「安政6年(1859)己未三月吉日」に設けられたこの石造物には「左 いづも往来」「右 天満宮道」と彫りこまれており、旅人の道案内の役割を果たしていた。

06 挹翠園跡

尾道市長江一丁目/江戸時代中期



18世紀に造園された庭園。天明6年(1768)に、竹原出身の学者平賀晋民(ひらがしんみん)によって書かれた「挹翠園記」には、ここから絶景に景色が見渡せたことや、手入れが行き届き美しい庭園であったことなどが記されている。庭園跡からは煎茶器が大量に発見されており、平賀や「遊挹翠園記」という詩をのこした頼山陽などの文人とともにお茶を楽しんでいたことがうかがえる。

07 柳水井戸

尾道市長江二丁目



文禄年間(1592〜1595)、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際、肥前名護屋から大坂城へ向かう途中で尾道に立ち寄り、当地の商人笠岡屋小川又左衛門宅に滞在した。滞在中、又左衛門は茶をたて秀吉をもてなし、その時に用いたのがこの井戸の水であったという。近くにはそのことを彫りこんだ、宮原節庵(みやはらせつあん・頼山陽の弟子のひとり)の石碑が建っている。

08 御袖天満宮


尾道市長江一丁目



菅原道真ゆかりの神社。寺の入り口にある門「随神門(ずいじんもん)」は延享年間(1716〜1736)に建築、左右には神を警護する「随神」が安置されている。境内には天保10年(1839)に作られた「さすり牛」と呼ばれる石造物があり、頭をさすると学業が成就するとされる。また、55段ある石段は約5mの一続きの石が使用されている珍しいものである。7月には天神祭りが行われる。

09 常称寺鐘撞堂(重要文化財)


尾道市西久保町
17世紀後期



正応年間(1288〜1293)に開基、暦応3年(1340)に足利尊氏により堂宇を建立された、全国的にみてもかなり古い時宗寺院である。鐘撞堂は4本の柱で正方形をなし(方一間の四脚楼門という)、入母屋造の本瓦葺きである。梁の組み方や装飾は細やかで非常に優れている。

10 西國寺仁王門(広島県重要文化財)

尾道市西久保町
慶安元年(1648)



広島県内では珍しい三間楼門(さんけんろうもん・正面から見ると柱が4本)。元文5年(1740)、文化3年(1806)に修理を加えているが、改造はほとんどないため古い手法をのこしている。両脇には仁王像を配置。また大きなぞうりが吊してあり、健脚を祈り奉納する人も多い。他にも国の重要文化財に指定されている、至徳3年(1386)建立の金堂、永享元年(1429)建立の三重塔などがある。

11 浄泉寺


尾道市西久保町



大永5年(1525)の開基と伝わる。裏庭には上田宗箇家元にあったという茶室「亀泉庵」が、原形のまま移築されている。本堂前の水盤(水を張っておく器)には頼山陽の銘がある。またこの下には石製の天邪鬼が8体あり、寝そべていたり座っていたりと様々な格好をしている。江戸時代、尾道の石工は全国的に有名であったといわれ、彼らの創意工夫が見られる作品である。

12 亀山八幡宮

尾道市西久保町



通称「久保八幡神社」。石清水八幡宮から神を尾道に迎えたのが始まりとされる。「亀山八幡宮」という名は、背後の山が亀の甲羅に似ていることに因んだものとされる。明治に入りJRの線路が敷設されると敷地は分断され、線路と道路を隔てた南側に一の鳥居が建っている。本殿前の二の鳥居は正徳6年(1716)に広島藩主・浅野吉長による寄進。境内には天保5年(1834)に作られた「軍配灯笼」といって、軍配の形を装飾した灯笼がある。

13 正念寺

尾道市西久保町/17世紀



正念寺は天正年間(1573〜1591)の開基の時宗寺院。本堂の柱を見ると、柱の上端をすぼめる粽(ちまき)があり、柱どうしをつなぐ部材である台輪があるなど、中国から伝来した禅宗様という様式を見てとれる。天井には弘化2年(1846)に、福山藩の御用絵師であった藤井松林や商人が寄進した彩色画が144枚あり、市有民俗文化財となっている。また延命の水が湧き出る「延命井戸」があり、江戸時代には西国街道を往来する人々にこの水を使って茶をふるまっていたという。

14 浄土寺 ※写真は茶室露滴庵


尾道市東久保町



聖徳太子が開いたと伝えられ、足利尊氏ゆかりの寺でもある。方丈は17世紀に豪商橋本家によって再建、唐門・庫裏・客殿・宝庫は18世紀に建立、裏門は19世紀に修復されている。また、茶室「露滴庵(ろてきあん)」は、向島において製塩業で財をなした富島家から、文化11年(1814)に寄進されたものである。いずれも重要文化財に指定されている。また庭園も文化13年(1816)、徳島の雪舟十三代の孫である長谷川千柳の茶庭と分かる貴重なもので、国の名勝となっている。

15 海龍寺本堂

尾道市東久保町/享保17年(1732)



浄土寺に隣接。一度衰退していた浄土寺を再び立て直したという僧侶伝説(じょうしゅう)が、永仁6年(1298)に仮住まいしていたとの記録がある。享保17年(1732)に再建されたという本堂は、天井以外は再建当時の様式をよくのこしている。本尊は聖徳太子作と伝わる千手観音菩薩像で、広島県重要文化財に指定されている。また、敷地内には文案の墓と呼ばれ、竹本弥太夫の墓と伝わる石造物がある。

16 爽籟軒茶室明喜庵(尾道市重要文化財)

尾道市久保二丁目/江戸時代



尾道の豪商橋本氏が所有していた茶園である爽籟軒の中にある。正確な建築年代は不明だが、嘉永3年(1850)の向板が現存しているため、この頃完成したと考えられる。二畳隅炉の茶室はその構造から、京都山崎にある千利休考案の茶室、妙喜庵待庵(みょうきあんたいあん)の写しと考えられる。ここには頼山陽や田能村竹田(たのむらちくでん)も訪れている。

17 八阪神社


尾道市久保二丁目/18世紀後半



元は常称寺の大門前に建てられた御旅所(神輿の仮置き場)であったが、明治時代の神仏分離に伴い現在地に移転し、厳島神社に合祀された。現在見られる軒唐破風(のきからはふ)、入母屋造りの拝殿は18世紀後半の建築である。境内にあるかんざし灯笼には、かつて芝居小屋で働いていた少女にまつわる悲しい伝説がある。7月には祇園祭があり、久保の一つ巴、十四日の二つ巴、土堂の三つ巴の三体神輿が八阪神社から本通りを練り歩く。

18 熊野神社

尾道市久保一丁目



正面から見ると、柱が2本、屋根は前面に長く伸びて反り上がった「一間社流造(いっけんしゃながれづくり)」の本殿がある。そばには「水尾井」と刻まれた井戸がある。付近にある水尾小路を中心とした一帯では、7月末に熊野神社の祭礼である水祭りが行われる。「水細工」といって、毎年さまざまな時事を取り上げて人形で表現し、人形の手や口から水が噴き出すといった仕掛けも披露され、大勢の人がつめかけ賑わいを見せている。

19 本陣跡


尾道市土堂一丁目



西国街道の宿駅には、本陣という大名や公家などの宿泊施設が設けられ、町役人や地元豪商の屋敷が充てられることが多かった。江戸時代に入り宿駅に指定された尾道では、商人であり町政も担っていた笠岡屋(小川氏)邸が利用された。一説には、玄関は尾道水道側にあり、360坪もの広大な邸宅であったといわれている。

20 住吉神社拝殿

尾道市土堂二丁目



寛保元年(1741)、町奉行平山角左衛門が主導の港湾整備の一環として埋め立てた時、浄土寺境内にあった当社を現在地に遷座する。以後、航海の安全や商売繁盛の神として特に商人の信仰をあつめ、商人の名を刻んだ玉垣が社殿を囲っている。現在の社殿は明治後期の建築、正面の屋根が中央部で盛り上がっている向唐破風(むこうからはふ)造り。また、尾道を発祥の地とする注連柱(しめばしら)であるが、ここには文政3年(1820)建立の国内最古の注連柱がある。毎年1月5日には当神社の前で初競りが行われ、尾道の風物詩となっている。


21 尾道町奉行所跡

尾道市土堂一丁目



現在の尾道商業会議所記念館の隣に該当する。奉行所は江戸時代に尾道の町政の中核であった施設で、年貢の収受、諸商売に関する注意、石見銀の運搬時の警備などを行っていた。安永3年(1774)に尾道を描いた「尾道絵屏風」(浄土寺蔵)には、町の施設や多くの寺の名称が記されており、そこには現在の跡地に相当する位置に「奉行所」とある。

※1 力石

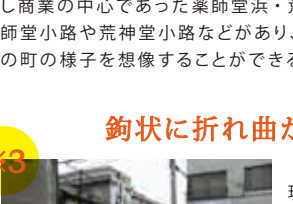


力石は全国的に見られるもので、持ち上げることでその力を競い合ったといわれ、鍛錬とともに一種の娯楽でもあった。日々多くの船が入り出ていた尾道には、荷物を積み下ろしする「中脊(中仕)」とよばれる港湾労働者があり、彼らはこの力石を肩にかついたり、頭の上に持ち上げたりしてその力を競っていたという。今では西国寺と住吉神社で確認できる。住吉神社には、かつて尾道一の力持ちと言われた「和七」の名を彫ったものがある。

※2 小路

尾道市街地にある小路の名は、多くが昔と変わらないまま残っている。江戸時代までであった浮御堂や海蔵寺に通じる小路であったため名付けられた浮御堂小路や海蔵寺小路、付近に小川氏や今蔵氏の屋敷があったことに因んだ小川小路や今蔵小路、江戸時代には市が立ち多くなる商品が集散し商業の中心であった薬師堂浜・荒神堂浜につながる薬師堂小路や荒神堂小路などがあり、その名称からは当時の町の様子を想像することができる。

※3 鈎状に折れ曲がった道



安永3年(1774)に現在の尾道市街地に当たった部分を描いた「尾道絵屏風」(浄土寺蔵)を見ると、本通りの道筋は当時とほぼ変わっていないことが分かる。本通りで特徴的な鈎状に折れ曲がった道が、常称寺大門前と郵便局尾道局前の2ヶ所に見られるのだが、これも同じ形のままだけ残っている。

